

学部長からのメッセージ

創造の時

商学部長 飯島 寛一

私は本学第4期の出身で半世紀以上ここに住み着いています。それにしても時の移ろいは目まぐるしくかつ速やかでまさに「光陰矢の如し」でした。しかし、それは中央学院大学の誕生、すなわち第1回の卒業から今日までの膨大なほぼすべてを見てきた時間になります。目をつぶれば次から次へと様々なシーンが巡りめぐって来ます。中央学院大学は、商学部の単科大学として出発し、法学部、商学部大学院、現代教養学部と枝葉を広げていまやその姿も雄大になってきました。よくぞここまで来たものと感慨無量です。しかし私たちはこんなものじゃない。まだまだとの思いがあります。

時とともに大学の様相は変わりました。その間、多くの先輩諸氏が門をくぐり、そして同じ門から巣立って行きました。私たちの仲間、いや皆さんの先輩諸氏はいまや全国にさらに海外に散ってそこに立っています。この50年は私たちの歴史を築いてきた「ひととき」なのです。伝統におんぶして来たものではありません。伝統をこの手で創造してきたのです。私たちはいまや建学の精神である「公正な社会観と倫理観の涵養」を具現化しつつあるのです。私たち一人ひとりの生き様を世に問うているのです。私たちはそれを自覚し確実な一步を、更にもう一步を踏み出して行こうではありませんか。

商学部は、時の流れを踏みしめ変容しつつあります。商学にヨミ・カキ・ソロバンは基盤ですが、今日のグローバル化に応じて多様性が求められています。現在、商学部には、それに対応すべく「商学総合」、「経営」、「国際ビジネス」、「会計」、「経済」、「情報」、「スポーツキャリア」の7つのコースが設置されています。そしてさらに高度な研究を求めるなら「大学院商学研究科」があります。各コースは、商学においてそれぞれの研究の特色を描いています。何に興味を持ち、何をしたいのか、自らの夢をその中に投影してみてください。そして自らの将来をこの中から見つけ出してください。

1年次は、基礎を構築する時です。商学の専門分野へのアプローチは2年次から本格的に始まります。4年間で一言をもつ人材を育てるプログラムです。大学は研究する場です。それに必要なもの、道具はそろっています。大学は待つと与えられるところではありません。それを積極的につかみに行き活用してください。自分を思いっきり創造する、人生にまたとないチャンス場なのです。5年先を、10年先を、20年先を想像してみてください。いかに今が大切な時間であるか、実

感しなければなりません。

大学は、皆さん一人ひとりが自分の社会での思い描いた役割を現実化する場でもあるのです。商学部では2年次から卒業後の社会人として生きる場を描き、その実現のための準備プログラムがあります(BJP: Best Job Program)。また生涯有効を得るさまざまな資格プログラムも設けています(BLP: Business License Program)。皆さんは卒業までにそれぞれのコースで自らの信ずるところを丁寧に練り上げて行ってください。そうすれば必ず皆さんの発展・飛躍に直結します。



拓殖大学大学院経済学研究科博士課程修了。
専門は国際経済論で現在の研究領域は日本企業の長寿性。
担当科目は国際経済論、経済学史、国民所得論。

毎年恒例となっておりまいりましたが、今年度も、2018年12月2日に前任校の元同僚2名(和光大学および大阪経済大学)の担当するゼミ生との3大学対抗ゼミナール討論大会を開催する予定です。

2015年度第1回目の大会は、2015年12月12日に和光大学にて、本学、和光大学および岐阜聖徳学園大学の3大学対抗の討論大会および懇親会が開催されました。本学からは、2年生および3年生のゼミ生総勢約40名が参加し、圧倒的な人数で討論会に臨みました。

2016年度第2回目の大会は、2017年2月9日に栃木県の塩原温泉にて開催されました。当年度につきましては、前任校の元同僚2名のうち、1名が大阪経済大学に移籍した年度につき、演習を担当していないとのことで、本学3年生および2年生だけのゼミナール討論大会となりました。会場につきましては、昨年度のような教育施設ではないため、宿泊部屋の1室を使用し、機材につきましても、パソコン、プロジェクターなどは自宅から持参し、スクリーンの代わりにシートを使用し、ホワイトボードの代わりに模造紙とマジックを使用した手作りのプレゼンテーション討論大会となりました。こうした質素な環境であったにもかかわらず、昨年同様、遠慮無用の活発な議論が展開されました。

2017年度第3回目の大会は、大阪経済大学の演習担当教員が演習を担当することとなったため、2018年1月6日に大阪経済大学にて、本学、和光大学および大阪経済大学の3大学対抗の合同研究会および懇親会が開催されました。

当年度は、1月6日という地域によっては成人式の前日かつ大阪経済大学という遠方の会場であるにもかかわらず、航空機、夜行バス(日帰り組)や新幹線(宿泊組)を利用して、2年生および3年生のゼミ生総勢約20名が参加してくれました。ゼミ費の補助を除いて、学生の旅費や宿泊費については、可能な限りの補助を支給させていただきましたが、それにしても、予想外に多くのゼミ生が駆けつけてくれて、感激いたしました。

そして、2018年度第4回目の大会は、いよいよ本学中央学院大学セミナーハウスにて、大会を開催させていただくこととなりました。今年度につきましては、本学より「特色ある教育活動に対する特別補助」を採択いただき、ゼミ生、担当教員ともに、身の引き締まる思いです。おかげ様にて、2年生のゼミ生につきましては、16名が参加できることとなりました。また、3年生のゼミ生につきましても、12名が参加できることとなりました。

今年度は、各大学共通論題「AIと就職活動」、本学2年生の自由論題「電機業界と自動車業界の異業種提携」、本学3年生の自由論題「飲食業界・外食産業による福祉・介護業界への異業種参入」をそれぞれテーマとして掲げ、発表する予定です(2018年11月9日 拙稿提出時点)。昨年度以上にリハーサルを重ねて、控えめながらも、粘り強さで大会に臨みます。このたびも、このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございます。



昨年度大会の開会式(2018年1月6日)



今年度大会に向けてのプレゼンリハーサル

2018年12月にスウェーデンのヨーテボリで開催されるWinter Simulation Conference (WSC) 2018に参加し、「Application of IoT-Aided Simulation for a Cyber-Physical System」について発表して参りました。WSCはシミュレーション分野で最も権威のある国際会議であり、発表した内容は以下の通りです。

近年、新世代の情報技術、特にクラウドコンピューティング、ビッグデータ、IoT (Internet of Things, モノのインターネット) およびAI(Artificial Intelligence, 人工知能) の進歩に伴い、インダストリー4.0が広く議論されている。次第に製造業では劇的パラダイムシフトが進行しつつあります。これら時代の変化と共に、IoTから収集した大量データを活用し、最適な生産活動を自律かつ継続的に行うスマートファクトリーの実現が次世代ものづくりの鍵といえるでしょう。そのなかで、デジタルツインは次世代ものづくりにおいて重要な役割を果たすことが期待されています。デジタルツインは現実の「双子(Twin)」のようにIoTを生かすことにより、製造現場に関わる現実世界の動きをリアルタイムにデジタル空間上に忠実に再現して監視するものです。そのうえ、サイバー上で構築したシミュレーションモデルを稼働させ、現実世界のトラブルや機械の故障等を予測し、ダウンタイムを回避するための対策を施して、現実世界にフィードバックします。このようなことを通して、デジタルツインは自律化した生産とカイゼン活動を下支えます。デジタルツインは、ものづくりのスマート化を実現する際に重要なボトルネックである、サイバーとフィジカルの統合(Cyber

Physical Integration) の形成に新たな道を切り開くことが期待されます。

しかし、デジタルツインの実装に関しては、ロードマップやフレームワークに関する具体化した提案がなく、実装に関するアプローチの提案はまだ見当たりません。このような問題に対して、デジタルツインの概念を説明するうえで、デジタルツインを構築する際の課題を究明します。そして、デジタルツインを構築する際に機器から吸い上げたデータをリアルタイムにシミュレーションモデルに入力するスキームを提案します。さらに、ある模擬工場を対象にしたデジタルツイン指向のシミュレーションモデルの構築事例をとりあげ、提案したデータ入力スキームの可能性を検証します。



発表当日の光景

最終レクチャー

退職先生のラスト講義および研究報告のご案内

【最終講義】 日 時：2019年1月23日(水) 2限『国際貿易政策』：加藤先生最終レクチャー

場 所：661教室

タイトル：TPP (環太平洋経済連携協定)はどうなるのか？

※次年度から国際ビジネスコースを選んだ1年生の出席も推奨します

【研究報告】 日 時：2019年2月6日(水) 3限：松崎先生の研究報告(予定)

場 所：611教室

タイトル：T.S.エリオットの『荒地』と「伝統と個人の才能」を垣間見る

※トマス・スターンズ・エリオット(Thomas Stearns Eliot, 1888年9月26日～1965年1月4日) は、英国の詩人であり、劇作家と文芸批評家として活躍された。1948年度のノーベル文学賞を受賞した。詳しくは松崎先生のご報告にて(編集部から)。

1975年から43年の長きにわたって、本学にお世話になり誠にありがとうございました。多くの楽しい思い出がありますが、海外研修関連の思い出を回想させていただきます。

本学の長期研修期間中の1987年から1年間、ニューヨーク市立大学の客員研究員として、ニューヨークで過ごしました。当時、「国際投資撤退論」の分野では、第一人者のボドウィン教授にご指導を受けたことはその後の研究に大いに役立ちました。霍見芳浩教授と親しく議論できたことも楽しい思い出であり、日系企業の工場見学も行いました。日本と違い、サンフランシスコのトヨタの工場では、多くの女性労働者がベルトコンベアに沿って仕事をしていたことに驚きました。

一方、学生との海外研修も印象に残っています。1995年の中国研修はゼミ生の提案によるもので、万里の長城や天安門広場を訪問しました。当時の北京では自動車は少なく、自転車が目立ちました。翌年、1996年には台湾を訪れ、本学の姉妹大学である

淡江大学で、台湾出身のゼミ生の通訳による同大学の教授から講義を受けました。続いて1997年には韓国を訪問しました。

1996年の「大学創立30周年記念・海外調査研修団」では、選抜された4名の学生を引率し、ニュージーランドのリンカーン大学等を訪問しました。特に、マツダの合弁工場の見学が印象に残っています。本学の「国際ビジネス環境論」の授業の一環として、2005年にアイルランドを、2011年には台湾を再び訪問しました。これら海外研修による体験は学生にとって有意義なものであったと確信しています。今後もますます多彩な海外研修プログラムが組まれることを祈念いたします。



在職期間：1975～2018年度

今年度をもって退職することとなりましたが、これまでお付き合い頂いた教職員の皆様には心よりお礼申し上げます。また、学生諸君にも幸多かりしことを願いつつお礼申し上げます。

学生諸君に50数年前の日々退屈していた田舎の高校生の話をしたいと思います。その仲良し3人の同級生がそれぞれ急に変わってしまったという話です。

まずA君ですが、ある日突然、猛烈に勉強し出しました。お兄さんから勉強の仕方を教えてもらったといいます。信じ切った彼はまっしぐら、受験に関係ない授業は徹底して内職。結果、一浪して目標のK大に進みました。さらに面白味を知ってT大学院に進み、当初の望みを越えて自分の道を進んでいきました。

B君は何を思ったか、当時一般人にはほぼ不可能であると思われた留学を突然志し、懸命に努力。外国から招待状を獲得し、条件となっていた大使館の面接試験と某国際クラブの保証を取り付けて、無償の一年間留学をやり遂げました。現地では大歓迎を受け、

まるで有名人扱いの一年だったそうです。

そしてC君。彼は歯科大を受験。点数では合格と確信していた彼は不合格。疑念を持ちながら別の大学に。卒業すると突然、シベリヤ鉄道を経由してヨーロッパへ。柔道の得意な彼はその地で道場を開き、人気を博し現地の女性と結婚。

これらの話で言いたいことは、希望する道を進んでいると輝くものだという事です。猛烈に不安だが、不思議にわくわくした気分と力が湧いてどこまでも前に進むのです。その時あの輝きが出ます。これは誰にでも起こることです。

学生諸君、どうぞ充実した人生を送ってください。有難うございました。



在職期間：1982～2018年度

